みんなが「藤」を愛するまち。2

「牛島の藤」の愉しみ方。

樹齢1200年を超すといわれる古木が一斉に薄紫色の花房を垂らす「藤花園」の牛島の藤。
その最大の魅力が花の美しさにあるのは言うまでもないが、五感を研ぎ澄ませて、
普段とは違った視点で園内を眺めてみると、また新たな魅力を発見できるだろう。

樹は根元から数本に分岐して、藤棚の面積は約700平方メートルにも及ぶ。昭和30年に国指定特別天然記念物となり、平成元年には「新日本名木百選」にも選ばれた。

昭和3年の「牛島の藤」（春日部市郷土資料館「かすかべデジタル写真館」より）

大蛇のごとく曲がりくねった藤の根は生命力の象徴

国内最大級といわれ、国指定特別天然記念物の牛島の藤は、ただ美しいだけでなく、幾多の文化人に愛されたことでも知られている。

詩人の三好達治は、晩年、毎年のように藤花園に足を運び「牛島古藤花」という詩を詠み、「はんなり」という京言葉を使って藤の花の優雅さを讃えた。

幸田露伴の娘・幸田文は、蛇のようにうねり、からみ合う太い根回りを見て、花のやさしさや美しさと、おどろおどろしいながらも強大な生命力を感じさせる根回りの対比に強く驚いたと随筆に記している。この随筆には「牛島の藤」と明記されてはいないが、前後の文章からこの園の藤だと推測できる。地面を大蛇のように這い回りながら天に向かって伸びる複雑で醜怪な根元に目を向け、そこに生命の力強さを見ているのが印象的だ。

強い生命力こそが花の美しさの鍵

現在、藤花園を管理している園主の小島喜久雄さんも、藤の樹が持つ生命力についてこう語っている。

「園では、藤棚やそれを支える柱は、コンクリートの擬木ではなくすべて木製にしています。微妙な高さの調節ができ、樹に無理がかからないからです。また、肥料として酒かすや漢方かすを与えるなど、花付きをよくするための工夫も凝らしています。ただ、いくら手をかけても、人間の思い通りにいかないのが藤の難しいところです。藤の花には冬と夏の温度差も大いに関係していて、夏が涼しすぎても冬が暖かすぎてもうまく花を咲かせてくれません。人の手のかけ方だけでなく、四季の気候に対応して生き続ける藤の強い生命力こそが、花の美しさの鍵を握っているのです」

甘く優しい藤の香りに酔うなら早朝か夕方がお勧め

さらに小島さんは、花の美しさや、風雨にさらされて変形した幹や根以外に、もう一つ注目して「感じて」ほしいものがあると言う。

「それは花の香りです。三好達治の詩にも、藤の香りが昔を思い起こさせてくれる、という一節があったはずですが、満開の藤が発する香りには、独特の優しい甘さがあって、嗅いでいると気持ちがすーっと癒やされるのです。日中の直射日光が強い時間帯は香りが飛んでしまうので、藤の花の香りをじっくり楽しみたいなら、早朝か夕方に園に来ていただくことをお勧めします」

この日も、園内には、早朝にもかかわらず、台湾からの団体旅行者が大型バスで来園していた。最近では、主にアジアなど海外からの観光客も多く訪れていて、藤の甘い香りに思わずうっとりとしながら園内を散策している。

藤というと、優雅に垂れ下がる花房ばかりにどうしても目がいきがちだが、今春の藤の季節は少し趣向を変えて、見た目の美しさだけでなく、生命力あふれるおどろおどろしい根元や、甘く優しい花の香りにも注目し、藤の花の魅力のすべてを味わい尽くしてみてはいかがだろう。

「藤花園」園主 小島 喜久雄さん

もともと牛島の藤は蓮花院（れんげいん）という寺にあったが、明治７年に廃寺となり、昭和初期に小島家の所有となった。「私ができるのは生育を陰でフォローすること。手をかけすぎても、抜きすぎても美しい花は咲かない。その見極めが難しいですね」

藤花園

平成30年度の開園日

４月20日～５月６日、開園時間８時～18時。入園保存料大人１０００円、子ども５００円。開花情報などは藤花園のホームページで確認ください。